



Title	「世界貨幣」と「資本の商人資本的形式」：宇野弘蔵教授の所説にたいして
Author(s)	降旗，節雄
Citation	北海道大學 經濟學研究, 16(1), 1-32
Issue Date	1966-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31142
Type	departmental bulletin paper
File Information	16(1)_P1-32.pdf



「世界貨幣」と「資本の商人資本的形式」

——宇野弘藏教授の所説にたいして——

降 旗 節 雄

は じ め に

さきにわれわれは『資本論』第1巻、第1篇「商品と貨幣」、第2篇「貨幣の資本への転化」の領域を、価値の実体規定との直接的関連から分離して、流通形態論として純化再構成した宇野弘藏教授の原理論の方法について考察した。（「貨幣の資本への転化の方法的考察——『資本論』体系における資本の必然性の論証について——」『北大経済学研究・第14巻、第1号』所収、参照。のちに『資本論体系の研究』第1篇、第2章に収録。）

これにたいして宇野教授から詳細な解答があたえられた。（『「貨幣の資本への転化」について——降旗節雄君の批評に答える——』『社会労働研究・第11巻、第3号』所収。以下この論文は「転化」と略称して引用する。）

この教授の論文は、内容的に二つの部分に大別できよう。その前半では、われわれの教授の見解にたいする誤解ないし理解の不充分さについて指摘されるとともに、われわれのこの問題にたいする解釈の欠陥をつかれている。そして後半では、この「貨幣の資本への転化」の問題について、「世界貨幣」のカテゴリーと「資本の商人資本的形式」とに焦点をあわせつつ、教授の積極の見解が披瀝されている。とくにこの後半における教授の主張は、教授の『経済原論』においても明確にはしめされておられなかったいくつかの新たな論点を提示されたものであって、いわゆる宇野理論の核心的領域をなす原理論の方法を理解するうえに、みのがしえない重要性をもつと思われる。

したがって本稿では、まずこの後半における教授の積極的主張を中心として検討しつつ、それとの関連において前半の諸論点についてふれていく

注)
い。

注) 本稿では、上・下二分冊からなる宇野教授の最初の『経済原論』(岩波書店版)を『旧原論』、『経済原論』(岩波全書版)を『新原論』と略称して引用する。なお『資本論』は青木文庫版、『経済学批判』は岩波文庫版から引用し、それぞれ『資』および『批判』と略称する。訳文は必ずしも前記邦訳どおりではない。

1

この論文で宇野教授は、教授のいわゆる「流通論」のカテゴリーについて注目すべき二つの主張をおこなってられる。

第一は「貨幣」としての貨幣のうち、「貨幣の蓄蔵」、「世界貨幣」は「特殊の歴史的なるもの」であり、したがって「原理論では理論的に解きえないもの」である。『旧原論』では『資本論』にしたがって、この二つのカテゴリーを原理的なものと規定したが、これは修正して『新原論』におけるように、原理論のカテゴリーとしては前者は「貯蓄」、後者は「資金としての貨幣の使用法」とし、「蓄蔵貨幣」は「貯蓄の歴史的に特殊なる形態」であり、「世界貨幣」は「資金の特殊の使用法の内に包括されて規定される」(「転化」35頁)ものとすべきであるというのである。

第二は、むしろこれと逆に、「商品、貨幣の場合と異って、資本にあっては、その形態規定も、資本主義社会に先きだって具体的にあらわれる商人資本、金貸資本によって与えられ」(「転化」34頁)るべきである。つまり「商人資本的形式はむしろ商人資本自身によって、また金貸資本的形式は金貸資本自身によって、その形式としての理論的規定をも与えられ、産業資本の一面をも示すことになる」(「転化」35頁)というのである。

『資本論』第1巻、第1篇における諸カテゴリーは、一般に理解されているようないわゆる「単純商品生産社会」のそれとしてではなく、発達した資本主義社会から抽象されたカテゴリーとして把握されるべきであるとする宇野教授の「原理論」にかんする主張からすれば、いちおうこの第一点は、教授の流通形態論の徹底化であり、『旧原論』にうけつがれていた『資本論』

におけるカテゴリー把握の不純性を払拭したものであるとうけとることができるであろう。

これに反して、第二点は、むしろ流通形態論の中で、とくに資本形態のもつ「商品と貨幣」論にたいする異質性——その資本主義社会に先きだつ歴史的特殊性——を強調するものであって、これまで主張されてきた教授の「流通論」の方法と根本的に対立する見解のように思われる。

だがわれわれは、発達した資本主義からの理論的抽象として純粋な流通形態論を展開するという教授の原理論の基本方法にしたがうかぎり、第二点の主張をただちに容認しえないばかりでなく、また第一点の「貨幣の蓄蔵」や「世界貨幣」のカテゴリーを、「原理論で理論的に解きえない」「特殊の歴史的なるもの」として、流通形態論のカテゴリーから排除するという見解にも疑問をもつ。

以下順をおって、これら諸カテゴリーの性格について検討を加えつつ、教授の主張にたいするわれわれの疑問を具体的に提示しよう。便宜上ここでは、まず第二の資本形態論の検討からはじめることにする。

宇野教授は、商品論において「単 純 商 品 論」を主張する論者にたいして「いわゆる単純商品は如何なる生産関係の下に生産されたかを明らかにしない商品であり」、「それは形態規定への純化を、封建社会乃至資本主義社会のいわば間隙に生存する小商品生産者を機械的に抽象して一社会とするという現実的に見えながら、実は非現実的な規定をもって常識的に排除しようとするものにすぎ」ず、もともと「商品形態自体に単純商品なる形態があるわけではない」（「転化」14頁）と批判されたが、同じ流通形態論のなかで、とくに「資本形態」にかんしては、「 $G-W-G'$ にしても、 $G\cdots G'$ にしても、資本主義社会に先きだつ諸社会における商品経済に具体的に商人資本、金貸資本乃至高利貸資本としてあらわれるものであって」「これらの具体的な現象を離れて論ずるわけにはいかない」（同上）として、その商品論ないし貨幣論との方法的差異を強調されるのである。もっとも教授はただ

ちにこれにつづけて「勿論、資本の形態論としては直接に商人資本、金貸資本を論ずるわけではない」（同上）とされるのであるが、そうなるとなおのこと、資本形態は「商人資本、金貸資本乃至高利貸資本」という「具体的な現象を離れて論ずるわけにはいかない」にもかかわらず、「資本の形態論としては直接に商人資本、金貸資本を論」じえないという教授の主張は、そのままではなんとしても納得しがたい難解な主張といわざるをえないことになろう。「資本の形態論」は、いかなる点において「商人資本、金貸資本乃至高利貸資本」の「具体的な現象を離れ」ずに、しかもまたいかなる点において「直接に商人資本、金貸資本を論ずる」ことなく、その規定を与えうるのであろうか。

もともと教授の原理論において「まず第一に商品、貨幣、資本の流通形態を明らかにしなければならない」とされたのは、「商品は、したがって貨幣は、さらになお部分的には資本さえも、古代、中世の社会のように商品形態をもって基本的社会関係を律しえない社会にも出現する」のであり「このことは商品形態があらゆる物に、それが如何なる関係の下に生産せられたかに関係なく、付与せられ得ることを明らかにするのであって、形態的には資本主義的生産を前提とすることなくして説明し得られることを示すものである」（『旧原論・上』19頁）からであった。だがこのことは「商品、貨幣、資本の流通形態」の理論的解明を、資本家の生産様式以前の商品経済を対象として逐行することを意味するものではない。純粋な流通形態としてあきらかにされるべき商品は「歴史的には依然として資本家の生産関係に規定せられた商品であって、単にその資本家の関係から抽象され、或いは進んで貨幣形態自身からも抽象されたものに過ぎない」（宇野弘蔵『価値論』青木書店版、31頁）のである。^(注)

注）流通形態論のこのような理解については、方法的にはさらに立入った考察が必要とされるであろうが、これについてはわれわれはすでに別の箇所^(注)で検討した。『資本論体系の研究』第1篇、第1章「流通形態論の基本構造」参照。

「商品、貨幣、資本の流通形態」にかんする教授のこのような主張にたい

して、この論文でしめされた「資本形態」の特殊な把握は、いわば一定の範囲においてではあるが、その方法的修正を意味するものと思われる。

この点をさらに立入ってみよう。ここで教授が、「流通形態」論における「資本形態」の方法的特殊性を主張される根拠は次のようである。「産業資本的形式は、形式としても生産過程を包摂するものとして当然に、労働力自身の商品化を前提とする。ところが労働力商品は、他の商品と異って生産物の商品化ではない。それはいわば商品、貨幣、資本の形態規定自身の展開の内に当然に前提されるものとしてすまずわけにはゆかない。資本主義に先きだって商品経済の行われる社会自身の歴史的变化によって始めて与えられるのである。いいかえれば資本は、そういう社会的基礎条件が与えられるまでは、商人資本、金貨資本の形式に留まらざるをえなかったのである。勿論、これらの資本によって促進せられる商品経済の拡大、深化は、そういう社会的条件の形成に役立つものといってよい。しかしそれは資本主義に生きたつ諸社会のいずれにおいても同じように、そういう社会的条件を形成しようというものではない。いいかえれば商品経済自身の発展によって形成せられるものではなく、商品経済の影響のもとに変化する旧社会自身の発展と変化との内に形成せられるのである。したがって若しわれわれが、経済学の原理的展開においても、商品、貨幣の展開と同様に、資本の諸規定の展開をも、単なる形態的なものとして行うとすると、この産業資本成立の歴史的基礎前提を無視することになる。」（「転化」36頁）

資本主義の確立は労働力の商品化を根本的前提とするものであり、この労働力の商品化は「資本主義に先きだって商品経済の行われる社会自身の歴史的变化によって始めて与えられるのである」が、「商人資本、金貨資本」「によって促進せられる商品経済の拡大、深化は、そういう社会的条件の形成に役立つ」のだから、「商品、貨幣の展開」の場合と異って、「資本の諸規定の展開」にあたっては、「この産業資本成立の歴史的基礎前提」の形成における「商人資本、金貨資本」の意義を考慮せねばならないということであろう。

しかしこの主張にわれわれは疑問をもつ。教授もいわれるように、この資本主義成立の「歴史的基礎前提」は、「商品経済自身の発展によって」——いいかえれば「商人資本、金貸資本」「によって促進せられる商品経済の拡大、深化」それ自身によって——「形成せられるものではなく、商品経済の影響のもとに変化する旧社会自身の発展と変化の内に形成せられる」としたら、「商人資本、金貸資本」の発展は、それ自身において資本主義成立の「歴史的条件」の形成を意味するものでないことは自明であり、原理論において商人資本的形式、金貸資本的形式を理論的に規定するにあいには、この「産業資本成立の歴史的基礎前提」と直接かわりなく、その形態規定が与えられるということは、むしろ当然というべきではないであろうか。

たしかに「単純商品生産社会」における「小商品生産者」の「分解」のうちに、この「歴史的条件」の形成を求めることは、資本の本源の蓄積における直接的生産者の収奪の暴力的過程がもつ歴史的意義を無視するものといわざるをえない。しかし、だからといって、商人資本的形式、金貸資本的形式の展開のうちに、かかる「社会的条件」の形成における「商人資本、金貸資本」の意義をみいだそうとするのは、結局「単純商品生産社会」の両極分解を主張する論者と同じく、たんに商品経済の発展のうちに資本主義確立の社会的条件を求めることになり、前者が商品、貨幣の理論的領域において主張したことを、一つずらせて資本形態論の領域で主張するというだけのことになりはしないか。つまり発達した資本主義からの抽象たる商品カテゴリーを出発点とする論理的展開の成果として与えられる流通形態論においては、「資本主義の発生期における商人資本乃至金貸資本の役割を十分に評価し」つつ、その理論的解明を与えるということは、そもそも不可能なのであり、資本形態論においては、「資本主義に先きだって商品経済の行われる社会自身の歴史的变化」、およびかかる「歴史的变化」のうちに与えられる資本主義成立の「社会的条件の形成」などの具体的関係は当然捨棄されているとしなければならぬのではなからうか。いいかえれば、「資本主義の発生期における商人資本乃至金貸資本の役割を十分に評価」することは、流通形態論の

はたしうる課題ではなく、それはこの「資本主義の発生期」を、その「確立期」ないし「爛熟期」との対応において把握したばかりにはじめて問題となしうる資本主義の歴史的発展段階論の課題とすべきであろう。

もっとも教授はこの主張につづけてただちに「経済学の原理論では、資本主義の発生期やその時代に支配的な資本形態としての商人資本を直接に問題とするわけではない」（「転化」36頁）とされるのであるが、しかしさらにまた補足して「16・7世紀の西欧諸国、殊にイギリスにおける資本主義の発生期における商人資本の役割は、『貨幣の資本への転化』の理論的展開においても、その背後にあってその指針を与えるものといってよい」（「転化」37頁）といわれるのである。一体、流通形態論としての資本形式の考察においては「資本主義の発生期やその時代に支配的な資本形態としての商人資本を直接に問題と」なしえないにもかかわらず、かかる「資本主義の発生期における商人資本の役割」が、その理論的展開の「背後にあってその指針を与える」というのは、具体的には何を意味するのであるか。

同じ主張を、教授はまだ次のようにも表現される。「16世紀以後のイギリスにおける資本主義の発達の過程」で「商人資本」が「資本の原始的蓄積を助長するものとして」機能するという「歴史的過程を〔原理論においては…引用者〕直ちに理論的に反映せしめるわけにはゆかない。」だが「理論的展開は、こういう歴史的過程を解明しうる、少なくとも基準を与えるものでなければならない。」（「転化」37頁）

理論的展開においては、「商人資本、金貨資本」の特殊な資本主義の発展段階においてもつ意義は「直接に問題とするわけ」にはいかないとすれば、かかる「歴史的過程を直ちに理論的に反映せしめるわけにはゆかない」のは当然であろう。にもかかわらずこの商人資本、金貨資本の特殊歴史的役割は、「理論的展開においても、その背後にあってその指針をあたえ」、かくすることによって「理論的展開は、こういう歴史的過程をも解明しうる、少なくとも基準を与える」ことになるというのである。

発生期における商人資本、金貨資本の特殊歴史的役割ないし意義は、資本

形態論にあっては、如何なる点において「直接に問題」とされず——つまり捨象され——、また如何なる点において「その背後にあってその指針を与える」——つまり反映される——のか。そもそも理論的展開において「直接に問題と」されない特殊歴史の事情が、「その背後にあってその指針を与える」ことが可能なかどうか。われわれは以上のような教授の主張のうちに、首尾一貫した方法的指摘というよりも、歴史的過程とその理論的処理にかんする混乱した見解の錯綜を読みとることしかできない。

そればかりでなく、商品、貨幣論では発達した資本主義からの抽象的カテゴリーの純粹なる形態的展開を主張されながら、資本形態論では一転して、ここにおいてのみ理論的展開の「背後」にその「指針」として「資本主義の発生期における商人資本乃至金貨資本の役割」を強調される教授の見解にたいしては、さらにたちいって次のような疑問が生じよう。

「資本主義の発生期における商人資本乃至金貨資本の役割」というのは、具体的には「これらの資本によって促進せられる商品経済の拡大、深化」が、「労働力自身の商品化」という「社会的条件の形成に役立つ」ことをさせているのであるが、このばあい当然「商人資本乃至金貨資本」は、広汎なる商品流通、貨幣流通の拡大、すなわち「世界市場」の発展を前提としつつ、さらにこれを「拡大、深化」するものとして存在しているのであって、産業資本成立の「歴史的前提」としての商品経済の発達とは、このような商人資本、金貨資本によって「拡大、深化」せしめられる全体としての「商品生産と発達した商品流通」の存在であろう。したがって産業資本成立の前提を形成するのに役立つ「商品経済の発達」という点からいえば、生産物の商品への転化、商品流通の拡大、貨幣流通の進展と区別して、商人資本、金貨資本の運動のみを抽出して論ずるわけにはいかない。もちろん商品流通の拡大や貨幣流通の進展が、それ自身で産業資本成立の歴史的前提を形成するものではないが、その点からいえば商人資本、金貨資本も同様であって、これらの資本はある程度の商品流通の発達を前提として、古代社会であろうと、中世社会であろうと、いわゆる「種々の世界間の空隙」(『資』⑨469頁)に

必ず出現するものであった。たしかにたんなる商品流通の拡大ないし貨幣流通の進展にとどまらず、これらを基盤としつつ、価値増殖を目的とする運動体としての資本が成立することが、旧来の生産様式を破壊する最も発達した商品経済の存在様式であり、資本家の生産様式成立の「社会的基礎条件」はこのような「商品生産と発達した商品流通すなわち商業」による旧社会関係の破壊過程のうちに形成されてくることはいうまでもないが、このような商人資本、金貨資本の運動は、広汎なる生産物の商品化、商品流通、貨幣流通の発展を前提とし、かつそれをさらに「拡大、深化」せしめるものとして、はじめて一定の歴史的な「時と処」とにおいて、かかる特殊な歴史的意義をにないうるのであった。

かくて資本主義成立の社会的条件の形成という歴史的過程にかんしては、まず商品や貨幣と区別して、商人資本、金貨資本にのみその意義を強調される教授の主張に疑問をもたざるをえない。そして、もしもこのように資本主義成立の社会的条件の形成という点にかんして、商品や貨幣のばあいと異り、資本のみを分離しつつその歴史的意義を強調することが誤りであるとするれば、これはさらにまた、教授が原理論において商品、貨幣のカテゴリーにのみその純粋なる形態的展開を求め、資本にかんしては「イギリスにおける資本主義の発生期における商人資本の役割」を「理論的展開」の「背後に」「その指針を与える」ものとして、いわば特殊な歴史的過程を反映した理論的展開を主張される論拠をもくつがえすことになる。

われわれは資本家の生産様式の一般的解明を、その発生、確立、爛熟の特殊歴史的発達過程においてでなく、発達した資本家の生産様式を前提としつつ、この生産様式に特殊歴史的規定性を与える流通形態の純粋なる展開と、その生産過程の全面的包摂の論理的過程のうちに逐行すべきであるとする、教授の原理論の方法にしたがうかぎり、商品、貨幣のばあいと区別して、資本形態論にのみ特殊な歴史的過程との対応ないし反映を求める教授のこの主張は、むしろ教授の達成された基本的方法からの逸脱をしめすものではないかと考える。

そしてこのような流通形態論における方法的混乱ないし基本的方法からの逸脱は、さらに教授の原理論における「貨幣」としての貨幣、とくに「世界貨幣」の把握と関連するのではないかと推測するのであるが——そしてかかる観点から前掲拙稿で若干の考察を試みたのであるが——、これにたいしてこの論文で教授から反批判が与えられるとともに、「貨幣」としての貨幣にかんする教授の積極的見解——さきにあげた第一の点——がしめされているので、ついでこの点について考察をすすめることにしたい。

2

「貨幣」としての貨幣、とくに「貨幣蓄蔵」と「世界貨幣」とにかんして教授は次のようにいわれる。「『資本論』は、……『貨幣』としての貨幣において、『貨幣の蓄蔵』、『世界貨幣』という、原理論では理論的に解きえないもの——もっともこの両者の中間の支払手段はそうでないが、そういう特殊の歴史的なるもの——によって貨幣の資金としての機能を説いている。私も、すでに述べたように、旧『原論』ではそれにしたがって『貨幣』としての貨幣を規定したのであった。しかしこれは貨幣と資本との違いについてなお明確にしないものがあったためではないかと考える。」（「転化」35頁）したがって教授は、「貨幣」としての貨幣の規定について若干の修正をほどこすべきだとされ、「旧『原論』では、『貨幣』としての貨幣を、『A蓄蔵貨幣』、『B支払手段としての貨幣』、『C世界貨幣』として、大体『資本論』によりながら展開していたのであるが、新『原論』では、『蓄蔵貨幣』を貯蓄の歴史的に特殊なる形態として、また『世界貨幣』は資金としての貨幣の特殊の使用方法として述べている。」（「転化」25頁）といわれるのである。

この主張は、資本形態についてのそれと異って、原理論を純粋な資本主義の運動法則の理論的把握とする教授の方法的前提にしたがうかぎり、むしろ自明のこととしてうけとられよう。資本家的生産の基礎上では、たんなる蓄蔵のために無限に貨幣を流通から引上げる「シシュフォスの労働」は、基本

的には自己増殖する価値の運動体という合理的機構の内部に吸収されて、それ自体としては存在しえなくなり、資本の循環過程においてあらわれる遊休貨幣資本の形成と、その銀行への集中も、たんに「貨幣の蓄蔵」としてではなく、資本家社会的な貨幣資本の合理的な配分機構の一環として意味をもちうることになるからである。つまりその点からして、たんなる「貨幣の蓄蔵」は資本家の生産の基礎上では存在しえないのだから、理論的にはこれを「貯蓄の歴史的に特殊なる形態」とし、「貯蓄の内に」「包括」的に「規定」するのが当然ということになる。

そしてまた社会的再生産過程が、資本家の生産として完全に自立的に運動する過程を対象とする原理論においては、『資本論』でのべられているように、世界市場ないし国際関係を前提とする「外国貿易はまったく捨象されるべき」（『資』⑦ 617 頁）であるのだから「国内的流通部面から歩みで」（『資』① 277 頁）で、「世界商業」ないし「世界市場」で機能する貨幣の存在様式としての「世界貨幣」は、「特殊の歴史的なもの」として、原理論のカテゴリーから排除されるのもまた当然ということになる。

しかし単純にそうやってよいかどうか。

宇野教授が主張されるように「『資本論』が一般の経済学と異った方法を示しているということは、それが資本主義の切断面を解剖しながら、それを単に平面的なものとしてではなく、歴史的過程の断面として取扱っている点にある。」より具体的にいえば、それは「一定の生産力の段階において展開された生産関係を、単にその現象形態において理解するというのではなく」、「又外部に現われた成長の過程を単純に歴史的に跡付けるといいうのでもない」のであって、「歴史的には一定の発展段階において達成せられる資本主義的関係を、いわば歴史的過程を通じた抽象によって分析する」（宇野弘藏『資本論の研究』32頁。以下『研究』と略称する。）という特殊な方法である。

原理論において資本家の生産過程解明の「序章」とされる「商品と貨幣」についても、それは資本主義以前の商品経済の発達を「単純に歴史的に跡づ

け」たものでもなければ、また資本家の生産様式における流通部分を「その現象形態において理解」したものでもない。資本家の生産様式を統一的な特殊歴史的な形成体として前提し、かかる統一歴史的な主体を抽象化しつつ、最も単純なカテゴリーのうちに把握したのが『資本論』冒頭の商品であって、このように「特殊歴史的性質を有する資本主義社会の分析による抽象」のうちに確定されたカテゴリーだからこそ、「商品自身がその有する二面的性質によって、発展して貨幣となり、更に又資本に転化するといった関係にある」、つまり「再び資本主義社会への復元を求めるものとしてあらわれる」（『研究』32頁）ことになるのであった。

このような原理論におけるカテゴリーの抽象的把握とその展開の特殊な方法とを念頭におくならば、われわれは『資本論』でなされている「貨幣」としての貨幣の第一形態およびその「概念に適応した」「貨幣の定在様式」を、「貨幣の蓄蔵」および「世界貨幣」という、直接資本家の生産の機構の内部ではあらわれえない「特殊の歴史的なもの」によって規定することは、むしろマルクスの貨幣論の卓越性をしめすものとして評価すべきではないかと考える。

これを宇野教授の『新原論』におけるように修正して、前者を「貯蓄」、後者を「資金としての貨幣の新たな機能」とするならば、たしかにいずれも資本主義社会において恒常的にあらわれる貨幣の機能として、一見理解しやすくなるものの如くであるが、しかしかかる把握にあっては「貨幣」としての貨幣の機能が、いわば平版化し、「貨幣の蓄蔵」「世界貨幣」というカテゴリーが「それ自身の内に」「合蓄していた」「ヨリ複雑なる規定の展開力」が喪失されることになりはしないだろうか。

たとえば資本主義社会においては、「貨幣蓄蔵者は気の狂った資本家」（『資』②293頁）にすぎず、その正常な運動機構の内部にあっては「合理的な貨幣蓄蔵者」たる「資本家」に席をゆずらねばならない。しかし商品経済はその発展過程において、かならず「貨幣の蓄蔵」という「シシュフォスの労働」をうみだし、それ自身において無意味なこの「シシュフォスの労働」

がやがて商品経済のより一層の展開とともに「合理的な貨幣蓄蔵者」としての「資本家」をうみだす「展開力」となるのである。もちろん、貨幣から資本への論理的展開は、商品経済の歴史的発展を直接にあとづけるものではないが、しかし資本主義社会では「合理的」なものとしてあらわれる資本家の行動の基底に、貨幣蓄蔵者の「気の狂った」衝動を、その未発展な胚種として確認するという点にこの「貨幣の蓄蔵」というカテゴリーの理論的意味がある。「絶対的な致富衝動、熱情的な価値追求は、資本家と貨幣蓄蔵者との共通なのである」(『資』②293頁)としても、両者を併存させて、その「共通な」性格を抽出するのではなく、前者の抽象的存在様式として後者を把握し、後者の合理的発展として前者をとらえる点に、『資本論』体系におけるこのカテゴリーの展開序列の方法的意義があるのである。

この点は「世界貨幣」についても同様にあてはまる。すでにみたように、『資本論』では、この「世界貨幣」は「諸国内的流通部面」をむすびつづける「世界市場」で機能する「貨幣の定在様式」として把握されていた。だが純粋な資本主義の論理体系にあっては、一社会を完全に支配した資本家の生産様式の「内的構造」が究明されるのであって、かかる資本主義的国家の対外関係としての「世界市場」ないし「外国貿易」は「まったく捨象されるべきである」とする『資本論』の方法にしたがえば、この「世界市場」における「世界貨幣」は、「原理論では論理的に解きえない」「特殊の歴史的なるもの」として、その理論的なカテゴリーとしての存在を排除するのが、首尾一貫した考え方のように思われる。けれどもこの場合にも、資本が社会的再生産過程を完全に支配しつつ、その産業資本としての具体的運動機構を展開する第1巻、第3篇以下の論理構造と、かかる展開の「序章」をなす「それ自身として考察された単純流通」の領域とでは、その性格ないし方法においてなお考慮されるべき質的差異をもつのではなからうか。つまりこの「それ自身として考察された単純流通」は、完全に発達した資本家の生産様式から抽象されたカテゴリーの展開として与えられるとはいえ、すでにかかる抽象的カテゴリーとしては、特定の生産様式との直接的関連をそれ自身のうちに内包

しないのであり、その点からすれば、あらゆる社会にあらわれる商品経済に共通する「単純流通」関係を「それ自身として」展開するものにすぎない。したがって発達した資本主義の運動機構の内部においては、具体的にはこの資本の運動のうちに吸収されてその直接的存在を否定される「単純流通」の категорияが、かえってここでは独立の存在を与えられることになる。「合理的」な資本の立場からは「狂気」とみなされる「貨幣蓄蔵」や、資本家の生産様式の内部構造にあっては論理的に消失する「世界市場」における「世界貨幣」が、この「それ自身として考察された単純流通」の領域では理論的に措定されざるをえないのは、この点に由来するのではないだろうか。

かかる関係は、もちろん「貨幣」の categoria においてだけでなく、たとえば商品の「価値形態」の理論的展開において、「簡単な・単独な・または偶然的な・価値形態」を出発点として、「全体的な・または展開された・価値形態」、「一般的な価値形態」を規定し、かかる「価値形態」の理論的發展を総括するものとして最終的に「貨幣形態」を把握するばあいにもひとしくあてはまるであろう。すでに商品経済の一定程度の發展は、かならず金を貨幣として固定化し、商品世界はこの独占的な一般的等価物との関係において、統一的な価値表現をなさざるをえないことになるのであって、商品流通の一般化と商品生産の全面的確立を特徴とする資本家の生産の基礎にあっては、商品ははじめから「貨幣形態」をもってあらわれることはいうまでもない。その点からすれば、いわゆる単純なる商品ないし生産物の商品化の過程を対象とするのではなく、資本家の商品の価値表現をとりあつかう「価値形態」論においては、「簡単な価値形態」「展開された価値形態」ないし「一般的価値形態」などは現実には存在しないものとして無視して、貨幣商品金による統一的価値表現としての「貨幣形態」のみをあつかえばたりと考えられるかもしれない。しかしかかる「貨幣形態」を理論的に把握しようとするかぎり、「簡単な価値形態」からはじまる一連の価値形態の展開の論理的確定が要求されるのであり、資本家生産の基礎上では具体的には存在しえないかかる価値表現の未發展な形態からの發展の成果として、はじめて

「貨幣形態」もその論理的必然性において把握されるのであった。そのような意味で、この「それ自身として考察された単純流通」の領域においては、資本家の生産の基礎上ではより発展した関係のうちに吸収される未発展な単純流通の諸関係が、それ自身独立したカテゴリーとしてあらわれ、その論理的展開が「貨幣形態」ないし「資本形態」の「発生史」としてあらわれることは、むしろ当然とされなければならない。

周知のようにエンゲルスは、『資本論』のカテゴリーのあつかい方に関連して「論理的なあつかいは、ただ歴史的形態と攪乱的偶然性というおおいをとりさっただけの歴史的なとりあつかいにはかならない」のであって、かかる意味での「歴史的経過の映像」は「修正された映像であるが、その修正は、実際の歴史的な経過そのものが、どの要因をも、それが完全に成熟し、典型的な形をとる展開点で考察できるようにすることによって、示唆してくれる諸法則にしたがって、おこなわれたものである。」（『批判』265頁）とのべている。

だが「論理的なとりあつかいは、じつは、ただ歴史的形態と攪乱的偶然性というおおいをとりさっただけの歴史的なとりあつかいにはかならない」というこのエンゲルスの命題は、「とり去」られるべき「歴史的形態」と、「とりあつか」うべき「歴史的」方法とにおける、「歴史的」なるものの意味を区別しないかぎり、まったく不可解な提言であり、それ自身矛盾した主張というべきであろう。われわれは、この「とり去」らるべき「歴史的形態と攪乱的偶然性」とは、資本主義の発生、確立、爛熟の過程におけるそれであり、「歴史的なとりあつかい」の対象とされるのは、他の生産様式にたいして資本家の生産様式がもつ特殊歴史的な質的規定性にかならないと考える。

資本主義の「歴史的経過そのもの」を対象とし、これを資本主義の「どの要因」も「完全に成熟し、典型的な形をとる展開点で考察」することによって、「歴史的経過」の理論的「修正」を実現し、かくすることによってその「抽象的な、かつ理論的に首尾一貫した形態をとった」論理体系をうるとい

うのは、具体的には商品経済の全面的展開のもとに、あらゆる社会の存立の基礎である人間の自然との物質代謝過程の完全なる支配を実現することによって、その特殊歴史的な生産様式を完成する資本主義の経済機構を、「論理的に一貫した」体系として把握することを意味する。

いいかえれば、商品、貨幣、資本という、それ自身では人間の社会的再生産過程に外的 (fremd) な物質代謝の特殊な媒介形式たる流通形態が、いかなる構造において、人間の自然との物質代謝一般、すなわち労働＝生産過程を完全にその内部に包摂し、自立的な運動機構を完成するかを論理的にあきらかにすることによって、資本家の生産が、それ以外の特殊歴史的な生産様式にたいしてもつ、その生産様式としての質的規定性の相違を原理的にあきらかにしうるのである。

そして流通形態が、それ自体としては特殊歴史的規定性をもたない——つまり人間の直接的な支配服従関係とは無縁な——物対物の客観的な社会的媒介形式であることは、商品経済が、特定の生産関係にかかわることなしに、一定の生産力の発展とともにつねに歴史過程に付随的にあらわれる特殊な社会関係であることからあきらかであるが、流通形態を、まさにかかる物対物の客観的な媒介形式として純粋に理論的に把握しようとするれば、このような資本主義以前の商品経済を対象としてではなく、ぎゃくにこの商品経済によって全面的に媒介された資本主義社会における流通関係を対象としなくてはならないという点に、この流通形態の理論的な把握にからむ方法的な難かしさがあった。というのは、資本主義社会以前の商品経済においては、それがその社会の物質代謝の部分的媒介をなすにすぎないがゆえに、つねに何らかの特殊な生産関係と部分的な関連をもちつつ成立するものとして、この商品経済をそれ自体として独立に分離して把握することが不可能であるのにたいして、この流通関係によって全面的に媒介される資本主義社会においては、かえってその生産過程から流通関係を完全に抽象して把握することが可能となるからであった。

したがって資本主義社会を対象として、その生産過程を全面的に捨象しつ

つ把握された純粋な流通形態のカテゴリーは、一面では、資本主義社会以前にあらわれる商品経済とその流通形態としての性格を共通にしつつも、他面では、資本主義社会であろうと、非資本主義社会であろうと、特定の生産力に規定された生産関係が単純流通に与える特殊な影響を捨象したものとして、その純粋なる展開を与えることになる。単純流通のカテゴリーの序列は、それ自身に純粋な論理的展開をとりながら、しかもそれが一種の発生史的展開をなすというのは、このような事情に由来する。

だから商品流通が、その必然的な展開の結果として、「商品の金蛹を固持する必要と熱情と」（『資』① 259 頁）をもたらすという関係を、「貨幣蓄蔵」というカテゴリーで把握するということは、けっしてこのカテゴリーを「原理論では理論的に解きえないもの」に解消するものではなく、むしろ純粋な流通形態の展開は、その過程において「特殊の歴史的なるもの」をも、論理的カテゴリーのうちに抽象化しつつしめすものとして理解すべきではないであろうか。たしかに資本家的生産の基礎上では、その流通過程においてかかる関係が具体的に独立してあらわれることはありえないが、それはすでにかかる関係が資本の蓄積過程のうちに吸収され、より高度な運動形式を展開しているからにはほかならない。だからといって「貨幣蓄蔵」を「貯蓄」に解消するならば、かえって資本家的生産の具体的な運動機構をいわば「平面的」な「切断面」としてとらえて、「単にその現象形態において理解する」という、宇野教授が排撃された「形式的な抽象」におちいることになるのではないであろうか。

また「世界貨幣」についても、すでにみたように、資本家的生産の原理的考察においては「世界市場」が捨象されざるをえない以上、これを「原理論では理論的に解きえないもの」とするのが当然のように考えられるが、流通形態論が、資本の生産過程をも捨象した純粋な流通形態の展開として与えられるばあいには、単純流通もたんに資本家的生産様式の「平面的」な「切断面」としてでなく、商品から貨幣へ、貨幣から資本へという論理的展開として、いわば発生史的展開をなすために、かえって「世界貨幣」もそのカテゴ

リーとしての存在を要請されることになるのではないかと考えられる。しかしこの点についてはわれわれの見解にたいして宇野教授の詳細な批判が与えられているので、それをてがかりとしてさらに具体的に考察しよう。

3

問題は「貨幣の蓄蔵」にしろ「世界貨幣」にしろ、それ自身では、たしかに完全に成熟した資本家的生産様式の内的構造の構成部分としては存在しないにもかかわらず、流通形態の論理的展開過程では独立したカテゴリーとしてあらわれざるをえない理由は何か、ということである。そしてまたこの「貨幣」として貨幣のカテゴリーとしての把握が、さらに資本形態の理解を規制せざるをえない点にある。ここでは「世界貨幣」と資本との関連について考えてみよう。

たしかに「資本家的生産様式が支配的におこなわれている社会の富」の「原基形態」として「商品」形態を把握し、この「商品」カテゴリーの論理的展開のうちに「貨幣」の、さらに「資本」のカテゴリーをあきらかにする『資本論』の理論構成においては、「国内流通」と「世界市場」とを区別する特殊歴史的規定性は、はじめから捨象されているはずである。もちろん資本家的生産様式の確立は、封建的社会体制の崩壊およびそれを前提とする近代的統一国家の成立と歩調を一にするのであるが、すでに確立した資本家的生産様式の内的構造をあきらかにする『資本論』にあっては、かかる「時と処」とを異にして進行する特殊な歴史的過程を直接にとりあつかうものではないし、またかかる歴史的過程は、たんなる商品経済の理論的展開として把握しうるものでもない。『資本論』体系において国際関係ないし国際貿易が、したがっていわゆる国際価値論が、理論的に展開されえないゆえである。

しかしだからといって宇野教授の主張されるように、この「世界貨幣」というカテゴリーを「特殊の歴史的なもの」として、まったく「原理論では理論的に解きえないもの」とすべきではなく、『資本論』の以上のような理論

的性格を前提としつつも、なお「世界貨幣」なるカテゴリーを、原理論における「理論的」カテゴリーとして把握すべきではないかと考える。といっても、もちろん『資本論』でなされているように、単純流通の理論的考察において、「国内流通部面」と「世界市場」とを質的に異る「流通部面」として規定することは許されない。マルクスのいわゆる「国内流通部面」とは、理論的には流通手段としての貨幣によって媒介された商品流通の最も単純な規定をさすものとして理解さるべきであろう。かかる流通にあっては、流通しつつある商品価額の変動によってそれに必要な流通手段量は増減せざるをえないのであるが、この流通手段量の増減は、いかなる商品経済的機構によって実現されるかはあきらかにされていない。つまりそのような抽象性においてとらえられた流通ということである。これにたいし、その外部の「貨幣」としての貨幣によって媒介される流通は、かかる商品流通のさらに具体的な展開をしめすものである。この過程をマルクスは、一方では、たんに「貨幣」としての貨幣の諸機能の並列的な説明へと解消し、他方では、以上の意味で抽象的に把握された流通を「国内流通部面」、「世界貨幣」によるその媒介を「世界市場」の流通部面として表象することによってかたづけたのであった。かくて『資本論』では、「貨幣」としての貨幣の規定の展開が、同時に商品流通の現実的運動機構の理論的展開をなす、という点が不明確とならざるをえなかった。これは根本的には、『資本論』の展開が、商品論においてすでに価値の実体規定を与え、商品流通はかかる価値関係の実現過程として把握されていたためであり、商品流通の考察においてすでに「自己の分散した諸環を分業の体制において表示している社会的有機体」（『資』① 225 頁）を前提しつつ、商品流通をかかる統一的生産「体制」としての「社会的有機体」の特殊な社会的物質代謝の媒介過程として、つまり統一的な「社会的有機体」の流通表面として、把握していたためであった。

だが流通手段によって媒介される商品流通は、それ自身ではなおかかる統一性と完結性とを達成しえない。そのことは、かかる流通が、それを媒介する流通手段の増減を、その外部にある「貨幣」としての貨幣の運動に依存せ

ざるをえないことによってもしめされているが、具体的には、この「貨幣」としての貨幣のいわば完成形態である「世界貨幣」において、「貨幣の定様式が貨幣の概念に適合したものとなる」ということによってしめされる。すなわち「世界商業において、諸商品はそれらの価値を普遍的に展開する」（『資』①277頁）ということは、同時に、この「世界市場」的関連において、商品流通が単純流通としての運動機構をはじめて完成するということの意味する。かくてマルクスのいわゆる「世界市場」なるカテゴリーは、具体的な「国内流通部面」にたいするものとしてではなく、商品流通はそれ自体としてはその外部にある「貨幣」としての貨幣に媒介された商品流通の相互的関連としてしか存在しえないという、単純流通の理論構造の「特殊の歴史的なる」事象に依存した表現にすぎないと解釈すれば、この「世界市場」ないし「世界貨幣」というカテゴリーも理論的カテゴリーとしての意味をもちうることになる。

この点では、流通からの貨幣の一方的引上げという関係を、「貨幣の蓄蔵」なる「特殊の歴史的なるもの」によりつつ、理論的カテゴリーとして確定したばあいと同じであろう。いずれのばあいも、純粋な資本家的生産様式の内部では直接的にあらわれえないにもかかわらず、しかも商品経済の論理的展開においては必然的にあらわれざるをえない特殊な関係を、マルクスは具体的な「特殊な歴史的なるもの」に依存しつつ、理論的カテゴリーとして把握しようとしたものと考えられる。だがこのばあい実際には、「世界貨幣」を「国内流通部面」と区別した「世界市場」における「世界商業」でとらえたように、このカテゴリーは、「特殊な歴史的なる」事情によって混濁せしめられつつ、かならずしも理論的に純化して把握されてはいなかった。

このような方法的混乱が、『資本論』において、単純流通を基礎とする資本の理論的成立過程、つまり単純流通の「最後の産物としての貨幣」がいかにして資本を展開するかを、理論的に把握することを不可能にさせたのであり、資本形態を、商品、貨幣とならぶ独立した流通形態規定として考察することを不可能にしたのであった。

宇野教授はすでにみたように、商品、貨幣のばあいと異って、「 $G-W-G'$ の形式」は「純粋な形態規定としてというよりも、商人資本自身の形式として考察されざるをえない」として、この資本形式にあっては「出来る限り安く買って、出来る限り高く売る、そしてその差額を利潤とする」という一般的規定以外には与えられないとされる。「いいかえれば商人資本の利潤は、商品が『価値どおりに』売れるかどうかということには直接には関係はない」（『転化』16頁）というのである。

だが教授も強調されるように「商品交換は元来『等価交換』を原則とするものである。」すなわち「無政府的に生産される商品生産物の売買は必ずしも『価値どおりに』売買されないにしても、結局は、それが『価値どおりに』売買されるように補整されるということになるのであって、価値形態の発展した価格形態は、まさにそういう補整されつつ貫徹される価値法則に適合した形態なのである。」（『転化』17頁）貨幣の価値尺度機能は、商品が「『価値どおりに』売買されるように補整される」基本的機構をなすものであるが、「貨幣」としての貨幣は、さらに流通の外部においても現実的な価値をもつ貨幣を媒介としつつ商品流通に必要な流通手段が調節され、商品流通における価値尺度機能が単純流通の全体的構造において完成されることをしめすのである。つまり商品は貨幣によって購買されることによって、その価値を個別的に尺度されるが、それは具体的にはたえざる商品流通の過程で、したがって流通手段としての貨幣の運動のうちに実現され、しかもこの流通手段としての貨幣は、かならずその社会的な量的調節を現実的価値をもつ「貨幣」としての貨幣に依存しつつ機能する以外にない。商品経済が、宇野教授のいわゆる「補整されつつ貫徹される価値法則に適合した形態」をそれ自身においてもつという関係は、したがってたんに貨幣の価値尺度機能にのみ限定されるべきではない。「貨幣」としての貨幣の「概念に適合した」「貨幣の定在」たる「世界貨幣」は、商品流通にたいしまったく外部から流入し流出することによって、流通界における貨幣量を根本的に調節しつつ、この流通界における「補整されつつ貫徹される価値法則に適合した」機構を

具体的に達成する。資本の商人資本的形式 $G-W-G'$ における貨幣は、それ自体としてはかかる「世界貨幣」として機能するのであって、 $G-W-G'$ は一定の流通界と他の流通界とを、この「世界貨幣」の機能をとおして、自己増殖する価値として運動しつつ媒介する流通形式にほかならない。

つまり「出来る限り安く買って、出来る限り高く売る、その差額を利潤とするのが商人資本で」あって、「商人資本の利潤は、商品が『価値どおりに』売れるか、どうかということには直接には関係はない」としても、この商人資本の運動によって、たんに流通手段によって媒介される範囲をこえて、流通界は相互に商品経済的に結びつけられることになり、商品経済はいまや「補整されつつ貫徹する価値法則に適合した」機構を、商人資本の媒介をとおして客観的に達成することになる。もちろん商人資本も「価値どおりに」売買することを目的とするものではなく、当然個別的には「出来る限り安く買って、出来る限り高く売る」ことを原則とせざるをえない。しかしこの点は、一般に商品の購買者、販売者につうずる原則であり、貨幣の価値尺度機能も、貨幣商品所が「出来る限り安く買おう」とし、商品所有者が「出来る限り高く売ろう」とする競争過程をとおして実現されるのである。問題は、商人資本形式にあっては、かかる一般的原則が、商品経済にたいして客観的にいかなる影響を与えるかにある。商人資本も、 $G-W$ の過程ではたんなる貨幣による購買者であり、 $W-G$ の過程ではたんなる商品の販売者にすぎない。しかし、商人資本としては、この二つの過程を統一した $G-W-G'$ の過程をもって自己の全運動とし、たんなる購買、販売ではなく、同一商品にかんして、その販売価格よりも「出来る限り安く買い」、購買価格よりも「出来る限り高く売る」ことが目的となる。いいかえれば商人資本は、購買のさいにはその販売市場における価格関係を予想し、販売のさいにはその購買価格を前提しつつ、売買をおこなわねばならない。たんなる売買関係にともなう「危険」とは、たしかに教授の強調されるように「いわゆる命懸けの飛躍」における「危険」であり、厳密に言えば「売手にとっての『危険』」(「転化」16頁)にすぎない。ところが商人資本にとっては、

商品の購買も販売もともに自己の価値増殖という目的を達成するための手段にすぎず、したがってその購買と販売とはつねにこの目的実現の成否をかけた「危険」がともなわざるをえないのである。そして「世界貨幣」はすでに、流通の外部にあって流通に対立する貨幣として、かかる商品流通の価値関係にたいして客観的に対応しうる位置を獲得していた。商人資本は、まずこの「世界貨幣」を運動の出発点とすることによって、あらゆる商品流通を外部的に比較しうる基準をもつのである。もちろん商人資本は、同一の流通圏内において価格変動を利用しつつ安く買って高く売ることもできるし、たんなる偶然的な価格差も利用しうることはいうまでもない。しかし世界貨幣を出発点とする商人資本としては、基本的には流通圏にたいし外部から対立することによって、それらの価格水準を客観的に評価しつつ、自己の売買を展開することをもって、その価値増殖という目的をかけた行動原理とせざるをえない。宇野教授もしたがって、「商人資本は『流通圏』の内部にあって、流通圏と流通圏との間の場合と同じ性質をもつ売買関係を展開するのであるが、ただ後者によって『代表』されるものといってよい」（『転化』20頁）とされたのであろう。じっさい商品が本来共同体と共同体との間から発生するということと、資本が流通と流通との間から発生するということとの間には、密接な論理的関連がある。

資本の商人資本的形式を、このような規定において把握するということは、いうまでもなくすでに理論的に展開された商品流通にかんして、一定の特殊な規定づけを与えていることを意味する。すなわち商品経済は、それがなお商品と貨幣との対抗関係によって規定された単純流通にとどまるかぎり、局地的な流通圏を形成する以外にないということである。マルクスのいわゆる「商品生産は、資本家的生産の基礎上ではじめて、生産の正常的な支配的な性格として現象する」（『資』⑤ 48 頁）という把握とも関連するのであるが、たんなる商品流通、商品生産をもってしては、ひとつの完結した社会的再生産過程を商品経済的に支配することは、したがって商品経済に規制された社会がひとつの生産様式として自立することはできない。価値法則に

よって貫徹された単純商品生産者の社会なるものを歴史的現実過程として想定することは、ブルジョア・イデオロギーに支配された一部経済史家の理論的ユートピアにとどまる。すなわち「資本〔産業資本—引用者〕が形成されて生産を支配しうるためには、商業の——つまり商品流通したがって商品生産の——特定の発展段階が前提されている」(『資』⑤48頁)のであり、この「商業の……特定の発展段階」とは、いうまでもなく「16世紀において、資本の近代的生活史を開始する」「世界商業および世界市場」(『資』②283頁)の展開であった。

このマルクスの指摘は、資本家の生産様式と商品流通との一般的対比のうちに与えられたものであるが、若干の意味の相異をふくむとはいえ、同様の関係は、単純な商品流通、貨幣流通と資本流通との対比においても与えられる。つまり商品流通、貨幣流通が「世界市場」的規模で展開されうるためには、それは「世界商業」に媒介されざるをえないということである。もちろん理論的規定として与える「世界市場」ないし「世界商業」は、ヨーロッパとアジアとか、ヨーロッパとアメリカという具体的なそれを意味するものではなく、それらの関係の基底にある、いわば局地的な流通圏と流通圏とを媒介するという一般的性格そのものをさしているのであり、ぎゃくにいえば、単純なる商品、貨幣関係としては、それ自体においてかかる流通圏と流通圏とを媒介しえない限界をもつということである。

もっともたんなる商品と貨幣との関連によっては、何故商品流通はなお局地的にとどまり、その局地性をつぎつぎと打破しつつ、終局的に「世界市場」ないし「世界商業」を形成する内的動力を有しないかという点になると、これはすでに純粋な論理的問題としてではなく、商品経済の歴史的発展における現実的関連をもって答える以外にないであろう。その点では、商品は何故共同体の内部からではなく共同体と共同体との間から発生せざるをえないか、あるいは「商品生産」は何故「単純商品生産者の社会」においてではなく「資本家の生産の基礎上ではじめて生産の正常的・支配的性格として現象する」のか、という問にたいするばあいと同様である。というのはもとも

と人間の本来的生産過程からでなく、その外部から発生した商品経済においては、それが人間の社会的関係を完全に支配しうるのは、歴史的な特定の生産力の発展段階を前提としており、したがっていかなる程度の実力力の発展が、かかる特定の発展段階をなすかということ、およびかかる生産力の発展そのものは、商品経済の発展のみによっては一義的に規定しえないからであった。

商品流通、貨幣流通の局地性にたいし、それを「世界市場」的関連において媒介する資本形式の意義を確定するためには、そのような意味で、歴史的過程における商品経済の発展の具体的関連を前提としつつ、それを理論的に抽象化して把握する以外にないであろう。

かかる意味においては、われわれも、貨幣の資本への転化、資本形態の発展という論理的展開が、一定の歴史的過程を反映しつつ遂行されるものであることを認めざるをえない。しかしそれは宇野教授が強調されるように「16・7世紀の西欧諸国、殊にイギリスにおける資本主義の発生期における商人資本の役割」をもって『貨幣の資本への転化』の理論的展開にたいし「その背後にあってその指針を与えるもの」(「転化」37頁)とするのではない。「貨幣の資本への転化」についても、商人資本的形式、金貸資本的形式の理論的展開についても、「その背後にあってその指針を与える」歴史的過程なるものは、商品経済の発展一般であって、古代世界におけるローマ商業であれ、中世社会の商業民族の活躍であれ、はたまた16・7世紀の「世界商業」であれ、本質的には区別はないとしなければならない。

4

『資本論』では、「商品と貨幣」については単純流通におけるその形態規定の考察をおこなっているが、資本については独立の形態規定としてでなく、ただちに産業資本としてあつたっている。「貨幣の資本への転化」の考察においては、たしかに $G-W-G'$ をもって「直接に流通部面で現象する資本の一般的範式」(『資』②297頁)としているが、しかしそれは「一般的範式

の矛盾」の究明の過程からもあきらかなように、「商品交換に内在する諸法則」すなわち価値法則に「基づいて展開されるべきであ」(『資』②313頁)としかぎり、単純流通の限界内では成立しえず、労働力という特殊な商品を媒介とした産業資本としてしか、その現実的存在は与えられえないとされている。

したがってマルクスはいう。商品ないし貨幣形態の成立のためには「商品流通の比較的微弱な発展で充分であ」った。ところが「資本については趣きが異なる。その歴史的な実存諸条件は商品流通および貨幣流通とともに決して定在しない。資本は生産手段および生活手段の所有者が自分の労働力の販売者としての自由労働者を市場で見いだす場合にのみ成立するのであり、そしてこの歴史的条件は一の世界史を包括する。だから資本は、そもそもから、社会的生産過程の一時代を告知するのである。」(『資』②319頁)

これは資本家の生産の確立以前の商品経済のうちに「商品・貨幣流通」のみをみて、商人資本、金貸資本の存在を無視するものであり、資本をもっぱら産業資本にのみ限定する誤りをおかしたものとわざるをえない。宇野教授もいわれるように「商人資本にしても、金貸資本にしても、資本に相違ないのであって、それはある程度に発展した『商品・貨幣流通があれば』そこにあるものといって決して間違いではない。労働力の商品化によってはじめて出現するのは、産業資本であって資本そのものではない」(「転化」38頁)のである。

このような誤った把握は何故もたらされたのか。むろんマルクスも、資本家社会以前の商品経済において、商人資本、金貸資本が資本として運動していた事実を知らなかったわけではない。だが資本家的生産様式の一般的究明にあっては、「商品と貨幣」の考察のみをもってその「序章」とし、独立した資本の形態規定をそれ自身として展開することなく、「産業資本を資本とする規定」をもって一貫せざるをえなかった。それはすでにふれたように、商品も貨幣も、そしてまた「貨幣の資本への転化」についても、それを理論的に把握しようとするならば「現象が純粹に考察されるべきであり、かくし

てその正常的経過が前提されるべきである」(『資』①226頁)とする、かれの方法的視角によって必然的にもたらされたものであった。単純なる商品関係において価値の実体を把握し、価値法則をまず商品概念のうちに確認すること、したがって商品流通にあっては、商品がその生産に必要な社会的労働時間によって売買され、「市場でただちに客観的に訂正される」がゆえにその価格表現における「純粋に主観的な誤算は度外視し」(『資』①224頁)、かつその「実体的転化」の可否の問題は理論的考察においては捨象すること、要するに商品流通は、それが「純粋に考察される」かぎり「等価物同志の交換」であり、価格関係は「商品交換に内在する諸法則」すなわち価値法則によって規制されるところをもつて理論的考察の「前提」であり、かつその対象たるべき「正常的経過」であるとするならば、かかる「正常的経過」をたどる商品流通を前提としては、いかにしても $G-W-G'$ 形式は「正常的経過」として成立することは不可能であり、したがってこの形式を「純粋に」理論的に考察することは不可能とならざるをえない。このような把握が、マルクスをして資本をもっぱら産業資本に限定し、商人資本、金貸資本の資本としての存在を無視するにいたらしめたのである。

そしてマルクスは、ここでこの資本の一般的範式の成立が単純流通を前提とするかぎり不可能である点をぎゃくに利用して、労働力商品を媒介とする産業資本の成立の必然性を論証するのである。だがある研究者によって「価値通りに売買されながら、どうして増殖がなされるかということを理づめにおしていく推理の面白さは、私にはヴェン・ダインの小説など比較にならぬ」(宇野・向坂編『資本論研究』至誠堂刊、454頁)と評価される、この論証過程の「理づめ」の「推理」は、けっして商品経済の現実的運動を論理的に反映した「理づめ」の「推理」であったとは思われない。問題の設定自体がすでに「等価物同志の交換」に規制された商品流通を「出発点」とするかぎり、もともと論理的には存立しえない「 $G-W-G'$ 」範式を無媒介に前提したものであったとすれば、「理づめ」の「推理」は、当然単純流通におけるかかる一般的範式の成立の不能をみちびかざるをえない。そしてこの

範式の成立を「一つの世界史を包括する」特殊な「歴史的條件」を媒介として $G-W \cdots P \cdots W' - G'$ の形式においてといたとしても、これはすでに課された「問題の條件」(『資』②313頁)の根本的変質のうえにたった問題の処理といわざるをえない。

具体的な歴史過程では、単純流通を基礎として資本流通が形成され、この資本流通がその内部に「一つの世界史を包括する」特殊な「歴史的條件」を包摂することによって、資本家の生産様式が確立せしめられたのである。理論的展開は直接歴史的発展を反映するものではないとしても、この歴史的過程の特殊な構造は、「『貨幣の資本への転化』の理論的展開においても、その背後にあってその指針を与えるもの」でなくてはならない。

宇野教授の『旧原論』は、『資本論』の「貨幣の資本への転化」の論証における以上のような混乱を整理して、まず「世界貨幣」を「新たなる出発点」として「 $G-W-G$ の新たなる流通形式を展開する」(『旧原論・上』72頁)ことによって、単純流通から資本の商人資本的形式を内在的にみちびきだすとともに、この資本形式を基礎として「資本の三流通形式の展開を明らかに」(『旧原論・上』74頁)された。つまり『資本論』の「貨幣の資本への転化」において錯綜していた問題点を、世界貨幣からの商人資本的形式の生成と、資本形式の展開による産業資本形式の確立との二つの問題領域に区分することによって整理しつつ、解答を与えられたのである。これは「『資本論』第1巻第1部『資本の生産過程』の第1篇『商品と貨幣』及び第2篇『貨幣の資本への転化』を第3篇以下から分離し、『流通論』として独立の形態論とするという」(『転化』13頁)教授の原理論の方法から必然的に結果する問題の処理であった。そしてこの「流通論として」の「独立の形態論」の把握は、商品、貨幣、資本という特殊な社会的媒介形式が「古代、中世のように商品形態をもって基本的社会関係を律しない社会にも出現する」「あらゆる物に、それが如何なる関係の下に生産せられたかに関係なく、付与せられ得る」(『旧原論・上』19頁)流通形態である点を現実的根拠としてなされたものであるかぎり、商品、貨幣はもとより資本について

も、そのカテゴリーとしての性格は、資本主義社会から抽象された純粋な「流通形態」としてのそれであり、またかかる理論的展開と対応する歴史的過程をもとめるとすれば、それは古代、中世をとわずその「基本的社会関係」と直接かかわることなくたえず付随的にあらわれる商品経済の発展一般とする以外にはない。そして資本が、もともと共同体と共同体との間から発生した商品関係の最も発展した形態にすぎず、商品・貨幣流通のある程度の発達にともなってかならずあらわれる特殊な生産物の媒介形式であるとするれば、宇野教授の強調されるように、「形態としては流通論で理論的に解明出来るし、またしなければ生産過程におけるその機能を明らかにすることも出来ない」（『旧原論・上』22頁）のは当然であろう。

ところが教授は一転して、この論文では「商品、貨幣の場合と異って、資本にあっては、その形態規定も、資本主義に先きだって具体的にあらわれる商人資本、金貸資本によって与えられざるをえず」「16・7世紀の西欧諸国、殊にイギリスにおける資本主義の発生期における商人資本の役割」をもって、「『貨幣の資本への転化』の理論的展開」にたいし「その背後にあってその指針を与えるもの」とされるのである。

もっともすでに『旧原論』における商人資本形式の展開自身に、かならずしも純粋な形態規定とはいえない把握がふくまれていた。商人資本的形式の資本の価値増殖は「一般的なる必然的根拠を有する価値増殖ではない。それは相手から価値を移転せられるにすぎない。社会的にはこの過程の前後になんらの価値の増加も行われない。かくてこの形式の資本はそれだけで社会的に支配的になり得いのである」（『旧原論・上』76頁）とされるばあいには明瞭に示めされているのであるが、この資本形式の「価値増殖」における「一般的なる必然的根拠」の欠如の指摘は、すでにたんなる流通形態としての把握をこえて、産業資本における価値増殖との具体的対比のうちに与えられたものである。「社会的にはこの過程の前後になんらの価値の増加も行われない」といっても、流通形態は、たとえ商人資本的形式においてもそれ自身で完結した「社会」を形成するものではない。産業資本として、労働＝生産過

程をその内部に包摂することによって、はじめて「社会」を形成し、したがってそこにおいてのみ「社会的に」「この過程の前後」をとおしての「価値の増加」を問題にしうるのである。商人資本形式の資本としては、安く買って高く売ることによって価値増殖をなすという以上の規定は与えられない。しいてこの「価値増殖」の「社会的」過程を問題にしようとするれば、この資本形式にあっては、基本的社会関係を多かれ少なかれ分解しつつあるものとして、具体的には小生産者にたいする収奪の過程としてしか把握しえないことになる。じじつ教授は「私のいわゆる商人資本的形式」は「実際は具体的な商人資本によって、その小生産者に対する不等価交換を基礎として考察されている」(「転化」32頁)といわれるのである。

だがこの資本形式を「小生産者に対する不等価交換を基礎として」把握するならば、発達した資本主義社会から抽象した純粋な形態規定の論理的展開として与えられた、教授の「流通論」の方法を根底からくつがえすことになりはしないであろうか。『資本論』のように「等価物同志の交換」という「商品交換に内在する諸法則」を前提としてこの資本形式の単純流通における存在を否定するのも、また教授のように「小生産者に対する不等価交換を基礎として」この資本形式の特定の歴史過程における存在を主張するのも、ともに資本の流通形態としての純粋な理論的考察をさまたげることになるのである。

商品、貨幣は純粋なる流通形態として展開し、商人資本的形式については「具体的な商人資本によって」規定するという教授の主張は、われわれにはやはりその「流通論」における方法的混乱として、そのまま容認することはできないが、しかしこの点はじじつは教授のいま一つの主張である、「貨幣」としての貨幣のうち「貨幣の蓄蔵」「世界貨幣」を「原理論では理論的に解きえない」「特殊の歴史的なるもの」とする把握と密接なかかわりをもっていたのである。というのは、この「貨幣の蓄蔵」「世界貨幣」をもって「原理論では理論的に解きえない」「特殊の歴史的なるもの」とする主張にあっては、流通手段の規定において措定された商品流通をもって、すでに確立し

た資本家の再生産過程の流通部面とする把握が前提されていると思われるからである。確立した資本家の再生産過程の一環としての流通部面にあっては、たしかに「貨幣の蓄蔵」も「世界貨幣」も独立したカテゴリーとしては存在する余地はない。いずれも資本の運動あるいは資本による商品としての金の生産のうちに吸収されて、その独自の存在を喪失しているからである。だが純粋な流通形態としての商品、貨幣のカテゴリーの展開の過程において与えられる商品流通は、まだかかる統一性と完結性とをもったものとしては指定されていない。根本的にはこの流通形態論の段階では、まだ市場にあらわれ購買されて市場から姿を消す商品の生産過程、消費過程が理論的に規定されえない点からもあきらかであるが、しかしこの商品流通自身にあってもなお商品経済としての機構的展開を十全に確立しうるものとはなっていない。つまりたんなる商品と貨幣との関連をもってしては、商品経済はかならず一定の限定をもった商品流通としてしか存在しえず、かかる展開における商品流通は、いわば部分的市場圏にとどまるのであり、その部分性ないし局地性の理論的確認が「世界貨幣」のカテゴリーによって与えられるのである。「世界貨幣」を出発点とし、「世界市物」的関連のもとに、商人資本的形式によって媒介されることによって、商品流通ははじめてその部分性ないし局地性を打破して、「世界市場」の構成要素として自己を指定することになる。その展開において、かかる「世界市場」的関連を実現する商品流通ないし資本流通にとって、いまや自己にたいする根本的制約としあらわれるものは、たんなる流通関係ないし流通形態ではなく、この商品経済の前提となり外部的に媒介していたところの生産過程、人間の自然との物質代謝の一般的基礎である生産一般にはかならないことはすでに自明であろう。「貨幣」としての貨幣の概念を完成するものとされる「世界貨幣」の意義も、これを「出発点」とする資本形態の展開も、さらにこの資本形態の展開による産業資本としての資本家の生産様式の確立も、基本的にはこのような商品流通の把握を前提としてはじめて理論的に統一的な理解をうるのではないであろうか。「貨幣の蓄蔵」「世界貨幣」を「特殊な歴史的なるもの」として原理論

の категория から排除することは、一見「貨幣」を純粹なる流通形態として把握するもののようにみえながら、実はすでに完成された資本家の生産様式の流通部面を直接に表象することによって商品流通の形態規定としてもつ限界の認識をさまたげることになり、その結果商品流通の展開が「貨幣」としての貨幣の規定を媒介として内在的にもたらず資本形式を、純粹なる流通形態の発展として把握することが不可能となり、それは反転して資本形式を、理論的な流通形態としてでなく、「小生産者に対する不等価交換を基礎とし」た具体的な商人資本の運動の規定のうちに埋没せしめることになるのではないかと思われる。

宇野教授自身、かつて『資本論』における「 $G-W-G$ 」範式の「貨幣の規定性」にかんする疑問にこたえて次のようにいわれた。「それは……世界貨幣でいいじゃないですか、世界貨幣で始めて理解されるものと思っている。世界貨幣というと、何か特別のもののように考えられるが、そうではない。大体商業というのが国内的でも世界的な要素をもっている、つまり国内市場が成立する迄は、国内も国外も区別はないと考えてもよい。そこでは貨幣が世界貨幣的な性格をもって居る。実際上もそうだが、理論的にもそういう具体的なものの抽象として考えてよいと思って居る。」（前掲『資本論研究』460頁）。

われわれの以上の考察は、結局この教授の見解の敷衍にすぎなかったのである。